

古英語動詞体系を歴史・比較言語学的に考察する (1)

田中, 俊也
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/7172716>

出版情報 : 言語文化論究. 52, pp.75-88, 2024-03-15. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



古英語動詞体系を歴史・比較言語学的に考察する (1)*

田 中 俊 也

0. 本稿の目的

本稿の目的は、古英語の動詞体系について最新の歴史・比較言語学研究の成果に基づいて考察することである。古英語の動詞体系の歴史的発達に関して、どのような問題についてどのような説明ができるか、あるいはどのような問題がどのような理由で未解決になっているかを明らかにするのが目的である。

1. 古英語の動詞体系の特徴

本稿では、古英語の動詞の活用について考察する。古英語の動詞の活用は2つの**時制 (tense)**、3つの**法 (mood)**の区別に従うものであり、主語の**人称 (person)**と**数 (number)**によって異なる活用語尾を取る。また、**定形 (finite forms)**としての動詞本来の活用に加えて、**非定形 (non-finite forms)**として、**不定詞 (infinitives)**と**分詞 (participles)**の活用がある。更には、活用の特徴から古英語の動詞は4つのグループに分類できる。古英語以来の英語の歴史において、これらの原則自体に大きな変更はなかったと言える一方、動詞活用の詳細については様々な変化があり、中英語を経て、近代英語および現代英語の動詞の活用のあり方につながっている。

1.1. 古英語における動詞の活用の特徴とその後の変化

古英語動詞の活用を考察する際、最初に重要な点は、古英語の動詞は**2つの時制 (two tenses)**と**3つの法 (three moods)**のうちのいずれかを選択し、それらによって活用形を異にするということである。換言すれば、**現在時制 (present tense)**と**過去時制 (preterit(e)/past tense)**、¹ **直説法 (indicative mood)**、**接続法 (subjunctive mood)**、**命令法 (imperative mood)**では、それぞれ異なる活用形を取る。² 更には、主語の**人称 (person)**と**数 (number)**によって、異なる活用語尾を取る。

動詞が時制によって異なる活用形を示すということは、分かりやすいと思われる。現代英語でも以下のような区別がある。

- (1) a. 現在時制 I drive a car. We love our cat.
 b. 過去時制 I drove a car. We loved our cat.
 c. 未来時制 I shall/will drive a car. We shall/will love our cat.

原則として、現在のことを表すのに動詞は現在時制を選び、過去のことを表すのに動詞は過去時制を選ぶ。では、未来のことを表すにはどうしたらよいか。現代英語では、(1c)に例示するように、法助動詞(modal auxiliaries)の shall, will を使った迂言形(periphrastic forms)を用いることで未来のことを表すことができる。しかしながら、古英語ではまだ shall, will などを使った未来時制というものが十分に発達しておらず、³ 未来のことを表すのに通常現在時制が用いられていた。古英語において現在形の動詞が未来を表す具体的な例については、小野、中尾(1980: pp.372-373 §671.1)、市川・松浪(1984: p.64 §3.1.1)、Traugott(1992: pp.180-183 §4.3.1.2)などを参照してほしい。⁴

さて、今度は法の区別であるが、現代英語の動詞が直説法、接続法、命令法によって活用形が区別されるということがどういうことか、頭に浮かぶだろうか。次のように、直説法現在、接続法現在、命令法⁵の形態を例示することが可能である。

- (2) a. 直説法現在 John/Mary goes to school.
 b. 接続法現在 It is natural/necessary that a student go to school. (米語)⁶
 I suggest(ed)/propose(d)/order(ed) that John go to Tokyo. (米語)⁷
 c. 命令法 Go to school.

(2a)の直説法現在の例では、主語が3人称単数のために動詞が goes という活用形になっている。こうなることは、よく理解できると思われる。これに対して、(2b)の接続法現在の例では、従属節内の動詞は主語が3人称単数なのに goes とはならず、動詞原形の go という形になっている。これはどうしてだろうか。(2c)の命令法の例では、相手に「行け」と命令する際に、動詞原形の go という活用形が用いられている。命令法では動詞原形を使用するというのは、よく知られた文法規則である。

という具合で、(2b)の例がよくわからないという学習者もいるであろう。ここでは法(mood)という概念が一体どういうものであるかということから、英文法を考察してみたい。時制(tense)と言われれば、それは時を表す概念だろうと直観的に理解できるのだが、法というの一体何なのだろうか。「法」という日本語は、「法律」などと言うように、「決まり」や「規則」というものを表すものである。しかしながら、そのように想像しても、英文法における「法」を理解することにはならない。英文法でつまづいてしまう人、英文法が嫌いになってしまう人は、「法」、特に「仮定法」を理解できずに挫折してしまうことが多いのではないだろうか。そういうこともあり、「法」とは何か、「仮定法」とは何かということから、もう1度考えてみたい。

英文法の用語である mood を「法」と訳してしまったことから、厄介な問題が始まったのではないかと私には思われる。英和辞典で確認してもらいたいのだが、mood には文法用語として以外に「法」「決まり」「規則」という意味はない。英語の mood は一般に「気分」「雰囲気」という意味を表す。そう、英文法でも mood を「気分」「雰囲気」と考えた方が、「法」と考えるより遥かに理解が容易になると言える。⁸

そうだとすれば、直説法(indicative mood; Lat. modus indicativus, Ger. Indikativ Modus, F. mode indicatif)と呼ばれる文法用語は、どのような概念を表すのだろうか。「直説」という訳語も固くて、何を意味するのかよく分からない。だからこそ、言葉の意味をよく考えてみることにしたい。英語の indicative は動詞 indicate の形容詞形であり、動詞 indicate は名詞 index の動詞形である。名詞 index は日本語に入って来ていて、「索引」「指標」等の意味で用いることがある。しかし、英語の

index はラテン語借入語であり、その元々の意味を知っておく必要がある。ラテン語の index の元々の意味は、「人差し指」である。つまり、index の原義は☞という印を形作っている「人差し指」そのものだということだ。そのため、その動詞形 indicate は、⁹「(人差し指で) 指し示す」と意味になる。その形容詞形 indicative は、「(人差し指で) 指し示すような」という意味になる。だから、日本語訳で「直説法」と呼ぶ概念は、「(人差し指で) 指し示すような気分、雰囲気」ということになる。文を発話する際に話者の「気分、雰囲気」によって動詞の形が変わるのが、インド・ヨーロッパ語の特徴である。¹⁰ そして、「(人差し指で) 指し示すような」とは、現実に関に目に前で繰り返り広げられていることを、人差し指を使って指し示すことであり、それは「事実を客観的に示す(気分、雰囲気)」にはかならない。従って、法 (mood, Lat. modus) とは、当該の文を発話する際の話者の心的態度であり、直説法とは事実を客観的に指し示すような心的態度(で発話する際に用いる動詞の形)であると言える。上の (2a) の John/Mary goes to school は、客観的な事実として「ジョンあるいはメアリーは(日々)学校に行く(習慣がある)」ということ述べている。従って、直説法(三人称単数現在)の形である goes が用いられている。

さて、今度は subjunctive mood (Lat. modus subjunctivus/conjunctivus, Ger. Konjunktiv Modus, F. mode subjunctif) を扱う番である。本稿ではここまで、この文法用語の訳語として「**接続法**」という表現を意図的に用いてきた。英語学習者の多くは、むしろ「**仮定法**」という言葉でこの概念を理解してきたことと思われる。また、我が国で出版されている英語史の教科書の多くは、「**仮定法**」という言葉を用いている。¹¹ 英文法では、この概念を「**仮定法**」と言い表すのが一般的だと思うが、subjunctive という語自体に「**仮定**」という意味は全くない。現代英語においては、**仮定法(接続法)現在(subjunctive present)**の用法が大幅に失われている。現代英語に生き残っている仮定法(接続法)現在の用法は、(2b)で示したように、主節に話者の判断・感情を表す形容詞がある場合、あるいは主節に命令・提案を意味する動詞がある場合に、従属節の動詞に出現する動詞原形の形(あるいはイギリス英語では should プラス原形の形)にほぼ限られている。これに対して、現代英語に残っている仮定法(接続法)の用法で最も顕著に見られるのが、If I were a bird, I would fly to you のような**仮定法(接続法)過去(subjunctive past)**か、If I had been Brutus, I would not have murdered Caesar のような**仮定法(接続法)過去完了(subjunctive pluperfect)**である。そういう具合で、現代英語においては if 節に関わる際に典型的に出現する表現であるから、「**仮定**」という言葉を使って subjunctive mood を訳したのであろうと推測される。しかしながら、subjunctive という言葉は「**仮定**」を意味しない。この語は、接頭辞の sub- 'under'、junct- 'joined'、そして形容詞形成接尾辞の -ive から形成されている。ラテン語で sub は副詞または前置詞で「下に」という意味を持つ。中心部の junct- は, jungēre 'to join' の完了分詞(過去分詞)である。従って、subjunctive の語義は「下に繋がられた」である。「下に繋がられた」というのは、どういう意味だろうか。I expect that John is an honest boy という表現は、that から始まる従属節が I expect という主節の下部部分に埋め込まれている。このように従属節として、主節の動詞の目的語として埋め込まれている状態こそが、「下に繋がられた」状態である。現代英語では接続法(仮定法)現在が廃れてしまって、直説法現在の is という動詞の活用形が従属節に用いられるようになってきている。しかしながら、以前の英語では、このような表現において I expect that John be an honest boy というように、従属節の動詞は接続法(仮定法)現在の形を用いていた。¹² このように I expect that ... などの「下に繋がられた」構文で典型的に用いられるのが、接続法(subjunctive mood)である。主節の動詞が「私は思う、推定する」であるが故に、従属節の内容が話者の主観的な想像世界(空想世界)となっているのが、「下につな

げられた」構文の特徴である。話者が頭の中で主観的に思いを巡らせた想像上の世界は、人差し指で指し示すことができない。直説法 (indicative mood) ではなくて接続法あるいは仮定法 (subjunctive mood) を用いるのは、このように話者の主観的な想念などを表す時となる。英文法が教える通り、仮定法 (接続法) 過去は現在の反実仮想 (事実に反する想像) を表し、仮定法 (接続法) 過去完了は過去の反実仮想を表し、反実仮想もまた話者の主観的な想念であり、そのような文脈でもやはり接続法 (仮定法) が用いられることになる。また、(2b) の2つの例でも、話者が自分の頭の中に存在する基準で判断するような文脈、あるいは話者が提案・命令する内容が話者の思いの中で繰り広げられる文脈となっている。こういう時に、接続法 (仮定法) が生じるのである。「下につなげられた」という表現は冗長なので、「下接の (気分、雰囲気)」とでもすれば良いのであろうが、ドイツ語文法やフランス語文法で使われている「**接続法**」という訳語を、英語の歴史的発達を扱う際にも使うことを提案したい。今後、本稿の文章で「接続法」とあれば、それは subjunctive mood のことであり、日本の英語史の教科書の多くで「仮定法」としているものに相当すると、理解してほしい。¹³

動詞が接続法の活用をするのは従属節に典型的に見られると説いたが、主節で使用されることもある。かなり古めかしい表現ではあるが、Long live the king, God save the king 「国王陛下万歳」 < 「国王が長く存命でありますように」 「神が国王を救いますように」 (いずれも話者の願望を表している) は、主節において接続法現在の動詞の形が残っている例である。このように話者の願望を表す表現では、事実を客観的に述べる心的態度ではなく、話者の頭の中で繰り広げられた主観的願いを表すために、直説法現在 (indicative present) ではなくて接続法現在 (subjunctive present) を用いることになる。

古英語の接続法 (仮定法) の具体的な用法として、小野、中尾 (1980: pp.392-413 §674.1)、市川、松浪 (1986: pp.66-68 §3.3)、中尾、寺島 (1988: p.66 (3)) などを参照してほしい。¹⁴

命令法 (imperative mood) は、文字通り「命令を表す気分、雰囲気」という意味であり、現代英語では (2c) に見られるように (2人称の主語を省いた) 動詞原形の形態で表現される。

さて、これまで論じたように、**時制がある動詞の形** (これを**定形 finite forms** と呼ぶ) では、直説法あるいは接続法の形を選び、¹⁵ 主語の人称と数に一致した活用形を選ぶこととなる。これに対して、動詞には**非定形 (non-finite forms)** と呼ばれる活用形もある。**不定詞 (infinitives)** と**分詞 (participles)** がそれに当たる。歴史的な観点からすれば、不定詞は動詞から派生した名詞 (verbal nouns) であり、分詞は動詞から派生した形容詞 (verbal adjectives) である。古英語では2種類の不定詞があり、ひとつが -an の形となる**対格不定詞 (accusative infinitive)** で (例: helpan 'help')、もうひとつが tō -enne の形となる**与格不定詞 (dative infinitive)** (例: tō helpenne 'to help') である。前者が現代英語の原形不定詞 (help など)、後者が現代英語の to-不定詞 (to help など) に当たるものだと理解してよい。分詞も2種類あり、ひとつが -ende の形となる**現在分詞 (present participle)** (例: helpende 'helping') で、もうひとつが -en の形となる**過去分詞 (past participle)** (例: holpen 'helped') である。¹⁶

具体例として、以下に示す動詞 *helpan* 'help' の活用表を見よう (市川、松浪 1986: 37):

(3)	<i>Indicative</i>	<i>Subjunctive</i>
<i>prs. sg.</i>	1 <i>helpe</i>	<i>helpe</i>
	2 <i>helpest hilpst</i>	<i>helpe</i>
	3 <i>helpeþ hilpp</i>	<i>helpe</i>
	<i>pl. helpaþ</i>	<i>helpen</i>
<i>prt. sg.</i>	1 <i>healp</i>	<i>hulpe</i>
	2 <i>hulpe</i>	<i>hulpe</i>
	3 <i>healp</i>	<i>hulpe</i>
	<i>pl. hulpon</i>	<i>hulpen</i>
<i>Imperative sg.</i>	<i>help</i>	<i>pl. helpaþ</i>
<i>Infinitive</i>	<i>helpan</i>	<i>Dative infinitive tō helpenne</i>
<i>prs. participle</i>	<i>helpende</i>	<i>past participle holpen</i>

この活用表を注意深く観察すると、古英語動詞の(強変化動詞の)活用の特徴を把握することができる。¹⁷ 定形から始めて、直説法現在 (*indicative present*; *ind. pres.* などと略す) の1人称単数、2人称単数、3人称単数、複数の形を、まず見てみたい。(3)の表の中に挙がっている2人称単数 **helpest* と3人称単数 **helpeþ* は想定上の形で、実際には生じない。実際に生じるのは、2人称単数 *hilpst* と3人称単数 *hilpp* の形である。¹⁸ 複数形では人称による区別が失われて、元々の3人称複数形に由来する *helpaþ* という形が一般化されている。¹⁹ 続いて直接法過去 (*indicative preterite*; *ind. pret.* などと略す) の1人称単数、2人称単数、3人称単数、複数の形を見てみよう。1人称単数及び3人称単数形 *healp* 'I/(s)he helped' は、文字通り過去単数形を反映するが、2人称単数形 *hulpe* は過去複数形の語幹 *hulp-* に活用語尾 *-e* が付いた形になっている。²⁰ また、複数形 *hulpon* は過去複数形の語幹 *hulp-* に活用語尾 *-on* が付いた形になっている。

次に接続法現在 (*subjunctive present*; *subj. pres.* などと略す) を観察すると、単数形は *helpe* (現在形の語幹 *help-* に活用語尾 *-e* がついた形) に一般化され、複数形は *helpen* (現在形の語幹 *help-* に活用語尾 *-en* がついた形) に一般化され、それぞれ人称による区別を失っていることがわかる。また、接続法過去 (*subjunctive preterite*; *subj. pret.* などと略す) に目をやると、単数形は *hulpe* (過去複数形の語幹 *hulp-* に活用語尾 *-e* がついた形) に一般化され、複数形は *hulpen* (過去複数形の語幹 *hulp-* に活用語尾 *-en* がついた形) に一般化され、それぞれ人称による区別を失っていることがわかる。²¹

続いて、命令法単数 (*imperative singular*; *imp. sg.* などと略す) *help* (現在形の語幹 *help-* に活用語尾ゼロが付いた形) と命令法複数 (*imperative plural*; *imp. pl.* などと略す) *helpaþ* (現在形の語幹 *help-* に活用語尾 *-aþ* が付いた形) の区別がある。

非定形については、まずは、不定詞 (*infinitive*; *inf.* などと略す) *helpan* (現在形の語幹 *help-* に不定詞の語尾 *-an* が付いた形) と与格不定詞 (*dative infinitive*; *dat. inf.* などと略す) *tō helpenne* (現在形の語幹 *help-* に語尾 *-enne* が付いた形) の区別がある。²² 続いて、現在分詞 (*present participle*; *pres. part.* などと略す) *helpende* (現在形の語幹 *help-* に語尾 *-ende* が付いた形) と過去分詞 (*past participle*; *past part.* や *p.p.* などと略す) *holpen* (過去分詞の語幹 *holp-* に語尾 *-en* が付いた形) のように、2

つの異なる分詞の形態が存在する。

後の歴史を考える上で、(3)の *helpan* ‘help’ の活用表について、いくつか注意したい点がある。まずは、直説法3人称単数現在形 (indicative 3rd person singular present; ind. 3 sg. pres. などと略す) である *help-ep* を見てほしい。ここでは活用語尾が *-ep* [eθ] となっていて、現代英語の *-(e)s* [s, z, ɪz] とは明らかに違う語尾となっている。これはなぜだろうか。それは、イングランド北部方言で10世紀に現れた直説法3人称単数現在形を形成する語尾の *-es* が、中英語期に南部の方言でも取り入れられるようになり、15世紀末にはロンドン方言を含む標準英語でも用いられるようになって、²³ 16世紀末には確立されることとなったためである。²⁴ また、17世紀になると *-es* の使用が急増する。16世紀末から17世紀初頭にかけて活躍した劇作家シェイクスピア (William Shakespeare 1564-1616) の戯曲では、*-eth* の形、*-es* の形双方が現れるが、²⁵ その後、後期近代英語に入ると *-eth* は *-es* によって駆逐されることとなった。

続いて、直説法複数現在形 (indicative plural present; ind. pl. pres. などと略す) である *help-ap* を見てほしい。ここでは活用語尾が *-ap* [aθ] となっていて、現代英語の語尾ゼロの形 (例: *we help*) とは明らかに違っている。これはなぜだろうか。それは、元々の接続法複数現在の活用語尾 *-en* を直説法複数現在の活用語尾として用いるようになったため、中英語末期である15世紀半ばには一般的になっていた形である。古英語では語尾 *-en* は [en] と発音されていたが、語末位置で強勢が置かれないうちに中英語で [ən] そして [n] となった後、初期近代英語に至ると発音されなくなったため語尾がゼロとなった。²⁶ (これと同様の変化として挙げることができるのは、不定詞の語尾が古英語で *-an* [an] だったのが中英語で *-en* [(ə)n] となり、初期近代英語に至っては語尾ゼロとなった事例である。)

今度は、接続法現在形 (subjunctive present; subj. pres. などと略す) である *help-e*, *help-en* を見てほしい。上で論じたように現代 (標準アメリカ) 英語では、接続法現在形は動詞原形で表される。古英語の不定詞が *help-an* なのに対して、現代英語の原形不定詞 = 動詞原形は語尾ゼロの *help* である。これと同様、古英語の接続法現在の語尾 *-e* [e], *-en* [en] は初期近代英語に至るまでに語尾ゼロとなった。従って、現代英語で接続法現在と原形不定詞 (動詞原形) は同じ形になっている。

更に、現在分詞の *help-ende* を見てほしい。現代英語では、現在分詞はもっぱら *-ing* によって形成されるのだが、*-ende* が *-ing* に音変化したとは考えられない。では、この変化はどう説明されるのだろうか。古英語には接尾辞 *-ing* があって、それは *-ung* と並んで動名詞 (gerund) を形成するものであった。²⁷ この動名詞形成接尾辞に由来する *-inge* が13世紀末頃にイングランド南西方言で *-inde* (< OE *-ende*) と並んで現在分詞を形成する接尾辞として用いられ、14世紀にはロンドン方言でも *-ing(e)* 形が現在分詞として用いられるようになった。そうして、中英語末期までに、動名詞も現在分詞も *-ing* で形成されるようになり、これが現代英語に受け継がれている。中尾 (1972: p.162 §6612.2)、中島 (1979: 166)、荒木、宇賀治 (1984: p.202 §3512.2) などを参照のこと。

次に、過去分詞の *holp-en* を見てほしい。古英語では、過去分詞に接頭辞 *ge-* [je] を付けてもよいし、付けなくてもよかった。(現代ドイツ語では、過去分詞に接頭辞 *ge-* [gə] が義務的に付くが、) 現代英語の過去分詞はこの接頭辞のない形になっている。しかしながら、初期近代英語期まで使用されていた *yclept* [ɪklɛpt] (*y-clept*; 古英語 (*ge*)*clypian*, (*ge*)*clipian* ‘call out, cry’ の過去分詞 *geclypod* からの発達形) ‘called’ の *y-* [ɪ] に、過去分詞に付いていた古英語の接頭辞 *ge-* [je] の名残りを見ることができる。この点について、中尾 (1972: 410)、中島 (1979: 165-166) などを参照されたい。

古英語において、*be + -ing* という形の進行形は未発達である。「～している」という意味は現在形

で表すことができ、「～していた」という意味は過去形で表すことができた。中英語になると be + (on) -ing の形の進行形が発達し (Mustanoja 1960: 584-599; 中尾 1972: 259-264; Fisher 1992: pp.250-256 §4.3.3.1などを参照)、近代英語になって be + -ing の進行形が現在形および過去形と意味において対立するようになり、頻繁に用いられるようになる (中島 1979: 227-230; 荒木、宇賀治 1984: pp.438-442 §5.4.6; Denison 1993: 371-412, 1998: pp.143-160 §3.3.3; Rissanen 1999: pp.216-218 §4.3.1.4; Killie 2014などを参照)。

古英語において、助動詞を用いた迂言的完了形 (periphrastic perfect) は存在した。しかしながら、現代英語のようにすべての完了形に have を用いるのではなく、cuman 'come', gān 'go', gangan 'go', gewitan 'depart', faran 'go', weaxan 'grow' などのように位置を変えたり状態を変えたりする変移動詞 (mutative verbs) の場合は、be 動詞 (古英語の変則動詞 *bēon/wesan*) + 過去分詞で完了形を構成した (小野、中尾 1980: 374-375; Traugott 1992: pp.190-193 §4.3.2.2などを参照)。この傾向は中英語、初期近代英語に受け継がれたが、18世紀末になると変移動詞に関しても be より have の方が完了形を形成するのに好まれるようになった (荒木、宇賀治 1984: pp.432-433 §545.1; Denison 1998: pp.135-143 §3.3.2; Rissanen 1999: pp.213-215 §4.3.1.2などを参照)。

1.2. 古英語における4つの動詞の種類とその後の変化

古英語の動詞体系の特徴について1.1節で論じたが、1.2節では古英語の動詞を4つの種類に分類することを試みたい。

古英語のハンドブックあるいは英語史の教科書において、古英語の動詞が(1)強変化活用、(2)弱変化活用、(3)その他の活用をする動詞と、3つに分類されることがある。例えば Brunner (1965: 348) は、強変化動詞、弱変化動詞に続く3番目の動詞のグループを「より小さなグループ (kleinere Gruppen, minor groups)」と呼んでいる。²⁸ 数の上からすると、強変化動詞 (strong verbs) と弱変化動詞 (weak verbs) が古英語動詞の圧倒的多数を占め、それら以外の動詞は極めて少ない。しかしながら、強変化動詞でも弱変化動詞でもない動詞は、形態的な特徴からして2つに下位分類するのが適切である。ひとつめが過去現在動詞 (preterite-present verbs)、もうひとつが変則動詞 (anomalous verbs) である。²⁹ 動詞の形態的特徴を考慮する場合、これらの2つの(下位)分類を、そのまま強変化動詞、弱変化動詞に続く、それぞれ独立した動詞グループと見るのが妥当な見解だと言える。このようにして古英語の動詞を4つに分類して、それら4つのグループの特徴をそれぞれ適切に把握すれば、有用な歴史・比較言語学的分析が可能になる。以下にこれら4つのグループの特徴を、簡潔にまとめてみたい。³⁰

(A) **強変化動詞 (strong verbs)**。現代英語の drive [aɪ] — drove [oo] — driven [ɪ] のように、動詞語幹の母音 (stem vowel) が変化することによって、原形 (あるいは現在形)、過去形、過去分詞の活用を表す動詞を強変化動詞と呼ぶ。³¹ このように強変化動詞の活用に観察される語幹母音の変化は、**アブラウト**あるいは**母音交替 (ablaut or vowel gradation)** と呼ばれ、これはインド・ヨーロッパ祖語において語形成や、語の活用形を形成する際に用いられる形態的な手段であったと考えられている。古英語において強変化動詞は312あってかなり生産的 (productive) だったものの、そのうち現代英語に受け継がれたものは66に限られている (中尾 1979: 134; 中尾、寺島 1988: 58-59)。強変化動詞は更に I-VII 類に下位分類され、4つの主要部 (4 principal parts) を持つといった詳細については、第2節で扱うことにする。

(B) **弱変化動詞 (weak verbs)**。現代英語の love — loved — loved のように、動詞語幹に歯音

(dental) に由来する接尾辞 $-(e)d$ [d, t, ɪd] を付けることによって、過去形と過去分詞の活用を示す動詞を、弱変化動詞と呼ぶ。このように $-ed$ で形成される過去、過去分詞の形を**歯音過去 (dental preterite)**と呼ぶ。³² 古英語において全動詞のおよそ75%が弱変化動詞で、極めて生産的であった(中尾 1979: 137; 中尾, 寺島 1988: 58)。この生産性の高さは、現代英語に受け継がれている。古英語の弱変化動詞は更に1-3類に下位分類されるが、詳細については第3節で扱うことにする。

(C) **過去現在動詞 (preterite-present verbs)**。現代英語で I can — (s)he can となる († (s)he cans とならない) ように、現在形なのに3人称単数現在形が $-s$ による活用とならない(古英語ならば $-eþ$ [eθ] による活用とならない) 動詞を過去現在動詞と呼ぶ。強変化動詞の過去形(例えば, I ran — (s)he ran で † (s)he rans とはならない)に相当する形態を用いて現在形を形成している動詞だという考えから、伝統的にこの名前で呼ばれる。古英語では現在形の **cann** (ic cann ‘I know’, hē/hēo cann ‘(s)he knows’) に対して、**cunnan** ‘know’ という不定詞が存在して、これらの活用形の間にはアプラウトあるいは母音交替が観察される。この点、強変化動詞と共通の特徴があると言える。また、このグループの動詞の過去形は歯音過去となり (ic cann ‘I know’ の過去形は ic cūþe (< *kunþa) ‘I knew’)、その点弱変化動詞と共通する特徴を持つ。古英語では12の動詞のみがこのグループに属するため、³³ 生産的でない動詞のグループだと言える。しかしながら、このグループに属していた古英語動詞から、現代英語の can, dare, may, must, ought (owe の過去形), shall といった重要な法助動詞(modal auxiliaries)が発達している点、意義深いものがある。このグループの詳細については、第4節で扱うこととする。

(D) **変則動詞 (anomalous verbs)**。強変化動詞、弱変化動詞、過去現在動詞のいずれにも分類できないような、特異な活用をする4つの動詞がここに属す。現代英語の be, will, do, go に当たる動詞である。³⁴ これらのうち be と go については、古英語以来ずっと補充法(suppletion)による活用が見られる。また、do については、その過去形 did には畳音(reduplication)の痕跡が見られ、その形態は動詞体系の発達過程について意義深い示唆を与えるように思われる。このグループの詳細については、第5節で扱うこととする。

注

* 本研究はJSPS 科研費19K00553および23K00525の助成を受けたものである。本研究は3部に分けて公開されるもので、本稿はその最初の部分となる。

- 1 「過去時制」という文法用語は the past tense でよいが、the preterit(e) tense と表現されることもある。イギリス英語では preterite という綴りを好み、アメリカ英語では preterit という綴りを好む傾向がある。
- 2 これは他のゲルマン語と共通の特徴であり、ゲルマン祖語(Proto-Germanic)の特徴を受け継いだものだと理解してよい。しかしながら、ゲルマン祖語ではまだ**2つの態 (two voices)**の区別 — 即ち**能動態 (active voice)**と**中動態 (middle voice)**の区別 — が動詞形態に残っていたと考えられている。これに対して、古英語などのゲルマン諸語ではこの区別を失っている。即ち、動詞の活用としては、能動態の形態のみを残している。能動態と異なる態である**受動態 (passive voice)**は、be 動詞などと過去分詞から成る迂言形によって表される。動詞形態に中動態の活用を残すゲルマン語は、ゴート語(Gothic)のみとなっている。しかし、ゴート語においても、現在形の中動態(受動態)のみが動詞屈折によって表され、過去形の中動態(受動

- 態)は *wairþan* ‘become’ あるいは *wisan* ‘be’ の過去形と過去分詞から成る迂言形で表現されることに注意したい (Prokosch 1939: p.219 §74; Wright and Sayce 1954: p.134 §284; Braune and Heidermanns 2004: p.141 §167.1; Miller 2019: p.176 §5.1, pp.216-219 §5.27などを参照)。
- 3 しかしながら、古英語において *sceal* (> ModE *shall*) や *wil(l)e* (> ModE *will*) を用いた迂言形が未来を表す用例は存在していて、迂言的未来時制の萌芽とでも言うべきものが見られる。この点について、小野、中尾 (1980: 450 and 447-448), Mitchel (1985: I. pp.426-427 §1023), Traugott (1989: 39-40), Denison (1990: 151-152; 1993: 304), Tanaka (2011: 54-55 and 57-58) などを参照。
 - 4 インド・ヨーロッパ祖語 (Proto-Indo-European) でも、動詞の時制のシステムは現在と過去の2つから成っていたと考えられている。ヴェーダ・サンスクリット語、ギリシア語、ラテン語などのインド・ヨーロッパ諸語において、接辞 *-s-* による動詞の未来形が見られるが (例: Ved. *kari-sy-āmi* ‘I shall do’, *παιδεύ-σ-ω* = *paideú-s-ō* ‘I shall educate’, Lat. *faxō* = *fac-s-ō* ‘I shall make’), これらはそれぞれの言語で独立的に発達したものだと考えられる。この点については, Sihler (1995: p.447 §413 and pp.451-452 §417), Szemerényi (1996: pp.285-288, §9.4.2), Weiss (2009: p.414), Beekes and de Vaan (2011: p.252 §18.1.1) などを参照のこと。
 - 5 古英語以来、命令法には時制の区別がない。(古)英語の動詞活用システムで命令法に時制の区別がないことは、ゲルマン祖語から受け継いだ特徴である。しかしながら、印欧祖語の動詞体系では、命令法に現在形と未来形の区別があったと考えられている (詳しくは, Szemerényi 1996: pp.247-249 §9.2.5; Meier-Brügger 2003: p.256 §S312; Fortson 2010: p.105 §5.54などを参照)。
 - 6 これに対してイギリス英語では、同じ意味内容を表すのに *It is natural/necessary that a student should go to school* となる。
 - 7 これに対してイギリス英語では、同じ意味内容を表すのに *I suggest(ed)/propose(d)/order(ed) that John should go to Tokyo* となる。このようにイギリス英語では、接続法現在 (subjunctive present) を法助動詞 *should* を用いて迂言的に表現する。
 - 8 ラテン語の文法用語で英語の *mood* に当たる言葉は *modus* であり、この *modus* には「方法、流儀」に加えて「規則」という意味もあるので、ここから日本語訳を案出したとすれば、「法」という訳を誤訳だと断じるわけにはいかないであろう。(ドイツ語でもラテン語借入語の *Modus* を、フランス語でもラテン語 *modus* から発達した *mode* という言葉を、文法用語として使っている。)しかしながら、それでも「法」という訳語では、どのような概念を表しているのか分かりにくいことに変わりはない。
 - 9 OED の語源欄で解説されるように、英語のこの動詞はラテン語動詞 *indicāre* ‘to indicate’, *indicō* ‘I indicate’ の完了分詞 (過去分詞) *indicāt-* から形成されたものがある。
 - 10 インド・ヨーロッパ祖語の動詞体系には、法 (*mood*, Lat. *modus*) に関して少なくとも4つの区別があったと考えられている。直説法 (*indicative mood*)、接続法 (*subjunctive mood*)、希求法 (***optative mood***)、命令法 (*imperative mood*) である。インド・ヨーロッパ祖語の接続法は、話者による予期などを述べる「心的態度」であり、インド・ヨーロッパ祖語の希求法は話者の願望などを述べる「心的態度」であったと考えられている (Meier-Brügger 2003: 257-259; Tichy 2006: 96などを参照)。希求法とは概ね、現代英語における *May the Queen live long!* 「女王陛下万歳!」のような表現に当たると思っている。インド・ヨーロッパ祖語からゲルマン祖語が発達した際、接続法の活用 (*-e/o- による動詞語幹形成) は失われて、元々の希求法の活用

- (*-i- による動詞語幹形成) が (新たなゲルマン語固有の) 接続法として用いられることになった (Bammesberger 1986: p.88 §13.2.1などを参照)。
- 11 例えば、中尾 (1979: 132, 182-184)、市川、松浪 (1986: 37, 66-68)、松浪 (1986: 28)、中尾、寺島 (1988: 65, 126, 184-185, 200)、児馬 (1996: 60-65)、家入 (2007: 73-74) などがそうである。これに対して、宇賀治 (2000: 205)、橋本 (2005: 134) では「假定法」と「接続法」という2つの用語が併記されている。また、中島 (1979: 163-188)、小野 (1980: 65, 121) では「接続法」という表記のみが用いられている。
 - 12 英語動詞 *ween* ‘*imagine, expect, think*’ では、中英語期頃まで従属節の動詞が接続法を取るのが一般的であった。中英語の例: *Ysaac wende it were esau* ‘*Isaac thought it was Esau*’ (before 1325 *Genesis and Exodus* 1.1543; *OED s.v. ween*). 古英語 *wēnan* の例: *hī wēndon þæt hē wære dead* ‘*they thought that he was dead*’ (*Ælfric’s Lives of Saints* 22, 232; 小野、中尾 1980: 395-396 を参照)。
 - 13 「假定法」、「接続法」のほかに、「叙想法」という訳語もこれまでに提案されてきた。例えば、細江 (1933)、安藤 (2002: 58-68, 121-125; 2005: 363-381; 2007: 87-106) などでは、*mood* を「叙法」、*indicative mood* を「叙実法」、*subjunctive mood* を「叙想法」と表している。
 - 14 中英語における接続法 (假定法) の用法については、中尾 (1972: pp.271-276 §7.7.1.2)、Fischer (1992: 248) などを参照されたい。また、近代英語における接続法 (假定法) の用法については、荒木、宇賀治 (1984: pp.398-408 §5.4.2)、Denison (1998: pp.160-164 §3.3.4)、Rissanen (1999: pp.227-231 §4.3.3) などを参照してほしい。
 - 15 命令法の動詞形態も定形だと理解してよいと思われるが、脚注5で述べたように、そこには時制の区別がない。また、2人称の主語しか取ることができない点、直説法や接続法の動詞形態と異なっている。しかしながら、古英語の命令法形態には、語尾がゼロとなる (2人称) 単数の命令形 (例: *help* 「君は助けなさい」) と語尾が *-ap* となる (2人称) 複数の命令形 (例: *helpap* 「君たちは助けなさい」) の区別がある。
 - 16 これら2種類の分詞をそれぞれ現在分詞、過去分詞と呼ぶのが最も一般的なので、本稿でもこれらの呼称を使うことにする。しかしながら、これらの呼び名から (古) 英語の分詞の体系には「現在と過去」という時制の区別が組み込まれていると理解するべきではない。それぞれの分詞が果たす機能を考慮すれば、「現在分詞」と呼ばれている分詞を「能動・未完了分詞」(*active/imperfect participles*) と呼び、「過去分詞」と呼ばれている分詞を「受動・完了分詞」(*passive/perfect participles*) と呼ぶのがより正確であると言える。他動詞から派生する分詞の場合、*a killing machine* は「(人を) 殺す機械」=「殺人機械」を意味するので「能動分詞」となり、*a killed virus* は「殺されたウイルス」=「死滅ウイルス」を意味するので「受動分詞」となる。自動詞から派生する分詞の場合、*falling leaves* は「今、目の前で (空中を) 落ちつつある葉」を意味するので「未完了分詞」となり、*fallen leaves* は「既に (地面に) 落ちてしまった葉」を意味するので「完了分詞」となる。
 - 17 古英語動詞 *helpan* ‘*help*’ は「強変化 III 類」に分類される動詞であり、活用の仕方が強変化 III 類動詞固有のものとなっている。「強変化 III 類」に具体的にどのような形態的特徴があるかについては、本稿の続きとなる第2節で扱う。
 - 18 ゲルマン祖語での直説法現在2人称単数形の語尾が **-iz* (< pre-PGmc. **-esi*) で、3人称単数形の語尾が **-id* (< pre-PGmc. **-eti*) だったために、これらの形ではI-ウムラウト (I-Umlaut) と呼ばれる音変化が生じ、語幹の母音が *-e-* から *-i-* に変化している。Campbell (1959: p.299 §732),

- Hogg (1992: p.55 §3.6-3.7), Hogg and Fulk (2011: pp.217-218 §6.12)などを参照。
- 19 このように3人称複数現在形の語尾が複数現在形全てに一般化されたのは、古英語や古サクソン語などの北海ゲルマン語 (North Sea Germanic) すなわちイングヴェオニック (Ingvaenic) の特徴である。西ゲルマン語の中でも古高ドイツ語では、直説法複数現在形でも人称による区別を保っている (1 pl. -umēs, 2 p. -et, 3 pl. -at)。Jasanoff (1994: 270-271), Fulk (2018: 275-276)などを参照。
- 20 強変化動詞の直説法2人称単数過去形で過去複数形の語幹を用いるのは、西ゲルマン語に共通する改新によるものである。一方、北東ゲルマン語では、直説法2人称単数過去形で過去単数形の語幹が用いられ、ゲルマン祖語でも同様だったと考えられている。Stiles (2013: p.16 §5.1 (3) B (a)), Fulk (2018: 277-278)などを参照。西ゲルマン語における強変化動詞の直説法2人称単数過去形の由来については、語幹形成母音によるアオリスト形 (a thematic aorist) が起源だとする説 (Prokosch 1939: pp.160-161 §56 b (1); Campbell 1959: p.298 §731(c); Hogg and Fulk 2011: p.222 §6.21などを参照)、完了希求法の形 (a perfect optative) が起源だとする説 (Jasanoff 2004: 272などを参照)、語根アオリスト希求法の形 (a root aorist optative) が起源だとする説 (Bammesberger 1986: pp.47-48 §5.3などを参照) などがある。
- 21 古英語の接続法現在および過去形では、このように人称による形態的区別が失われているが、北東ゲルマン語、および西ゲルマン語の中でも特に古高ドイツ語では、人称による形態的区別を保っている。詳細については、Fulk (2018: pp.279-282 §§12.26-12.27)などを参照。
- 22 与格不定詞の to **helpenne** に対して、**helpan** という形の不定詞は、対格不定詞 (accusative infinitive; acc. inf. などと略す) と呼ばれることがある。前者は元々の動詞の名詞の与格形、後者は元々の動詞的名詞の対格形を反映するからである。
- 23 しかしながら、15世紀末の時点では -es の形は脚韻位置のみに生じ、脚韻位置以外では散文よりまれであって、-eth の方がはるかに一般的な形であった (中尾 1972: 160などを参照)。
- 24 しかしながら、16世紀の間はまだ -eth の方が -es よりも好まれていて、-eth よりも -es の方が顕著に多く用いられるようになったのが17世紀のことであり、-eth が廃用になったのが18世紀末のことであった (荒木、宇賀治 1984: 197-201などを参照)。
- 25 同じ戯曲の中の同じ行に -eth と -es 双方が用いられることもある。例: It **blesseth** him that **gives** and him that **takes** (*The Merchant of Venice* IV, I, 187) (中島1979: 167参照)。
- 26 より詳しい説明として、中尾 (1972: pp.160-161 §6611.3)、中島 (1979: 167-168) なども参照されたい。
- 27 古英語の -ung は元々弱変化第2類動詞から動名詞を形成する (例 leornian 'learn' → leornung 'learning') のに対し、-ing は弱変化第1類動詞から動名詞を形成した (例 grētan 'greet' → grēting 'greeting')。前者による動名詞の方が、後者によるものよりも、数において勝っていた。小野、中尾 (1980: p.444 §6831.1) などを参照。
- 28 市川、松浪 (1986: 31-32) も古英語動詞を3つに分類して、それらを強変化動詞 (strong verbs)、弱変化動詞 (weak verb)、不規則変化動詞 (irregular verbs) と呼んでいる。中尾、寺島 (1988: 58-69) も類似の分類を行っている。
- 29 Campbell (1959: p.295 §726) に倣い、本稿は古英語 (あるいはゲルマン語の) 動詞を、強変化動詞 (strong verbs)、弱変化動詞 (weak verbs)、過去現在動詞 (preterite-present verbs)、変則動詞 (anomalous verbs) の4つに分類して考察を行うこととする。

- 30 以下のような4つの種類の動詞を持つことは、古英語だけではなくゲルマン語一般の動詞体系に共通する特徴であり、ゲルマン祖語から受け継がれたものだと考えられる。
- 31 ただし、強変化 VII 類に分類される動詞は元々、アプラウト（母音交替）によって活用するのではなく、畳音（reduplication）を用いて活用していた。この点については、第2節で詳述する。
- 32 [d]あるいは[t]は、音声学的に言って歯音と呼ぶよりも歯茎音（alveolar）と呼ぶ方がより適切である（Minkova 2014: 28などを参照）。（ただし、当該の接尾辞に含まれる子音の変異形が -p-[θ, ð] となることがあり、この場合は歯音と呼ぶのが適切になる。以下の(C)で挙げた *cann* ‘know’ の過去形などを参照。）しかしながら、(古)英語をはじめとするゲルマン語に見られる弱変化動詞が阻害音を含む接辞で過去形および過去分詞形を形成することについて、印欧語およびゲルマン語比較言語学では、そのように形成された過去形および過去分詞形を「歯音過去」と呼ぶ。ゲルマン祖語では、弱変化過去および弱変化動詞の過去分詞を形成する接辞に含まれる子音が *d-[ð]（および *p-[θ]）だったと考えられるため、この名称を得ることになったものである（Fulk 2018: 292などを参照）。
- 33 Campbell (1959: pp.343-346 §767), Brunner (1965: pp.349-352 §§420-425), Tanaka (2011) などを参照。
- 34 これら4つの動詞に共通する形態的特徴が存在し、それは印欧祖語における語幹形成母音を伴わない (athematic) 動詞形態に由来するように見えるということである。このため、これらの動詞は、語幹形成母音によらざる動詞 (athematic verbs) あるいは *mi*-動詞 (*mi*-verbs) と呼ばれることがある (Sievers 1908: 64; Wright and Wright 1925: 295; Brunner 1965: 352; Hogg and Fulk 2011: 308などを参照)。古英語の場合はこれら4つの動詞のみがこのグループに属すが、他の西ゲルマン語では *stand* に相当する動詞もこのグループに属することがある。例えば、古高ドイツ語1人称単数現在形 *stām, stēm* ‘I stand’ や古サクソン語2人称単数現在形 *stēs* ‘you stand’ などがそれに該当する。より詳しくは、Prokosch (1939: 219 and 223), Gallée (1993: 271-272), Braune and Reiffenstein (2004: 311-312), Hogg and Fulk (2011: 309), Fulk (2018: 336-337) などを参照されたい。古英語の *standan* ‘stand’ は強変化 VI 類に属することに注意したい。

参 考 文 献

- 安藤貞夫 (2002) 『英語史入門：現代英文法のルーツを探る』 開拓社。
- 安藤貞夫 (2005) 『現代英文法講義』 開拓社。
- 安藤貞夫 (2007) 『英文法を探る』 (開拓者叢書18) 開拓社。
- 荒木一雄、宇賀治正朋 (1984) 『英語学体系10: 英語史III A』 大修館書店。
- Bammesberger, Alfred (1986) *Der Aufbau des germanischen Verbalsystems*. Heidelberg: Winter.
- Beekes, Robert S. P. and Michiel de Vaan (2011) *Comparative Indo-European linguistics: An introduction*, 2nd edition. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.
- Braune, Wilhelm and Frank Heidermanns (2004) *Gotische Grammatik*, 20th edition. Tübingen: Niemeyer.
- Braune, Wilhelm and Ingo Reiffenstein (2004) *Althochdeutsche Grammatik, I: Laut- und Formenlehre*, 15th edition.
- Brunner, Karl (1965) *Altenglische Grammatik*, 3rd edition. Tübingen: Niemeyer.
- Campbell, Alistair (1959) *Old English grammar*. Oxford: Clarendon Press.

- Denison, David (1990) "Auxiliary + impersonal in Old English." *Folia linguistica historica* 9/1, 139-166.
- Denison, David (1993) *English historical syntax: Verbal constructions*. London: Longman.
- Denison, David (1998) "Syntax." In Romaine, Suzanne (ed.) *Cambridge history of the English language*, Vol. IV: 1776-1997, Cambridge: Cambridge University Press, 92-329.
- Fischer, Olga (1992) "Syntax." In Blake, Norman (ed.) *Cambridge history of the English language*, Vol. II: 1066-1476, Cambridge: Cambridge University Press, 207-408.
- Fortson, Benjamin W. (2010) *Indo-European language and culture: An introduction*, 2nd edition. Oxford: Blackwell.
- Fulk, R. D. (2018) *A grammar of the Early Germanic languages*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.
- Gallée, Johan Hendrick (1993) *Altsächsische Grammatik*, 3rd edition. Tübingen: Niemeyer.
- 橋本功 (2005) 『英語史入門』慶應義塾大学出版局.
- Hogg, Richard M. (1992) *A grammar of Old English*, Vol. 1: *Phonology*. Oxford: Blackwell.
- Hogg, Richard M. and R. D. Fulk (2011) *A grammar of Old English*, Vol. 2: *Morphology*. Oxford: Blackwell.
- 細江逸記 (1933) 『動詞叙法の研究』泰文堂.
- 市川三喜、松浪有 (1986) 『古英語・中英語初歩』研究社.
- 家入葉子 (2007) 『ベーシック英語史』ひつじ書房.
- Jasanoff, Jay H. (1994) "Germanic (le germanique)." In Bader, Françoise (ed.) *Langues indo-européennes*, Paris: CNRS, 251-280.
- Killie, Kristin (2014) "The development of the English BE + V-ende/V-ing periphrasis: from emphatic to progressive marker?" *English language and linguistics* 18, 361-386.
- 児馬修 (1996) 『ファンダメンタル英語史』ひつじ書房.
- 松浪有 (1986) 『英語学コース1：英語史』大修館書店.
- Meier-Brügger, Michael (2003) *Indo-European linguistics*, 8th edition. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Miller, Gary D. (2019) *The Oxford Gothic grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Minkova, Donka (2014) *A historical phonology of English*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Mitchel, Bruce (1985) *Old English syntax*, 2 vols. Oxford: Clarendon.
- Mustanja, Tauno F. (1960) *Middle English syntax*, Part I: *Parts of speech*. Helsinki: Société Néophilologique.
- 中島文雄 (1979) 『英語発達史 (改訂版)』(岩波全書143) 岩波書店.
- 中尾俊夫 (1972) 『英語学体系9：英語史II』大修館書店.
- 中尾俊夫 (1979) 『英語発達史』篠崎書林.
- 中尾俊夫、寺島廸子 (1988) 『図説英語史入門』大修館書店.
- OED (1933) *The Oxford English Dictionary*, 13 vols., comp. by J. A. Murray. Oxford: Clarendon.
- 小野捷 (1980) 『英語史概説』成美堂.
- 小野茂、中尾俊夫 (1980) 『英語学体系8：英語史I』大修館書店.
- Prokosch, Eduard (1939) *Comparative Germanic grammar*. Philadelphia: Linguistic Society of America.
- Rissanen, Matti (1999) "Syntax." In Lass, Roger (ed.) *Cambridge history of the English language*, Vol. III: 1476-1776, Cambridge: Cambridge University Press, 187-331.
- Sievers, Eduard (1908) *Abriss der angelsächsischen Grammatik*, 4th edition. Halle: Niemeyer.

- Sihler, Andrew (1995) *New comparative grammar of Greek and Latin*. Oxford/New York: Oxford University Press.
- Stiles, Patrick (2013) “The pan-West Germanic isoglosses and the sub-relationships of West Germanic to other branches.” *NOWELE* 66, 5-38.
- Szemerényi, Oswald J. L. (1996) *Introduction to Indo-European linguistics*. Oxford/New York: Oxford University Press.
- Tanaka, Toshiya (2011) *A morphological conflation approach to the historical development of preterite-present verbs: Old English, Proto-Germanic and Proto-Indo-European*. Fukuoka: Hana-Shoin.
- Tichy, Eva (2006) *A survey of Proto-Indo-European*. Bremen: Hempen.
- Traugott, Elizabeth (1989) “On the rise of epistemic meaning in English: An example of subjectification in semantic change.” *Language* 65, 31-55.
- Traugott, Elizabeth (1992) “Syntax.” In Hogg, Richard M. (ed.) *Cambridge history of the English language*, Vol. I: *The beginning to 1066*. Cambridge: Cambridge University Press, 168-289.
- 宇賀治正朋 (2000) 『現代の英語学シリーズ8：英語史』 開拓社.
- Weiss, Michael (2009) *Outline of the historical and comparative grammar of Latin*. Ann Arbor/New York: Beech Stave Press.
- Wright, Joseph and O. L. Sayce (1954) *Grammar of the Gothic language*, 2nd edition. Oxford: Clarendon Press.
- Wright, Joseph and Elizabeth Mary Wright (1925) *Old English grammar*, 3rd edition. London: Oxford University Press.